

近世・播州加古郡新野辺村における酒造稼（出稼）の展開

羽田 真也

はじめに

（１）本稿の課題

本稿は、播州加古郡新野辺村の社会構造を明らかにする一環として、一八世紀後半～一九世紀前半の新野辺村百姓の生業のありようを概観すること、そのうえで一八～一九世紀における酒造稼（出稼）の展開を具体的に把握することを課題とする。

その前提には次のような問題意識がある。ひとつは、新野辺村の社会構造把握に向けての作業であると同時に、新野辺村を含む加古川東岸（左岸）の播磨灘沿岸地域の歴史展開を描き出す作業でもあるという点である。近世史における都市論や身分論の展開をベースに一九九〇年代後半より顕著な進展をみせた地域論（地域史研究）においては、土地所有を核とする小農（小経営の家）が形成する共同体Ⅱ村社会を本源的な地域（生活世界）と捉え、それぞれの村に固有な社会構造を精緻に明らかにしていくことが要求されるとともに、^①そうした個性的な村社

会を基礎としながら、より広域の地域的まとまりを分節的に把握していくことが求められつつある。^②本稿が直接の対象とする新野辺村の周辺地域においても、現段階ではまったく漠然としたイメージにしかすぎないが、水利をめぐる諸関係などを基軸とした加古川東岸の播磨灘沿岸地域とでも呼びうるようなまとまりが存在していたと想定される。そして史料の残存状況からみて、新野辺村の社会構造分析が、そうした地域的まとまりの歴史展開を把握するうえでのひとつの軸になると考えられるのである。

二つめに、新野辺村百姓の生業のありようをみることの意図についてである。筆者はすでに新野辺村に関して、この村の庄屋でもあった大歳家が幕末期に新野辺村ほか一村などで構成される新野辺組の大庄屋を勤めていたこと、村内の住吉社で行われていた御頭という村落祭祀（他地域の座にあたる）などに着目して検討を行ってきた。^③しかしながら「地域生活レベル」^④から村の全体構造を説明していくためには、まずもって新野辺村百姓の生業のありようを押さえておく必要がある。

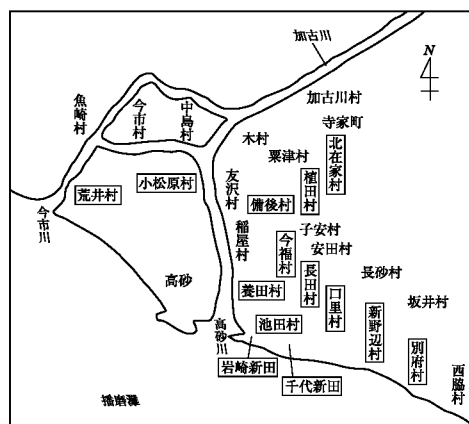
本稿はこの点を意識している。とはいえ、経営史料などを残す有力な家はともかく、それ以外の百姓一般の生業を史料から見出すことはそれほど容易なことではない。そこで注目されるのは、孝子褒賞などに関する史料から江戸や大坂における都市下層民衆の生業・生活の実態を抽出した研究である^⑤。これらの成果には、そうした史料が、幕府などの作成者側の意図（民衆教化）に注意をはらわなければならないものの、民衆一般の生業や生活を知る有効な素材となりうることを示されている。幸い新野辺村の史料群にも類似の史料が残されている。それを通して新野辺村百姓の生業をみていくことにしたい。

三つめに、生業を概観したうえで酒造稼（出稼）の展開を検討することの意味についてである。直接的にはこれに関する史料がまとまって残されているからであるが、分析視角としては二点ある。一点は、生業の問題を新野辺村の村社会の中に正確に位置づけていくための作業だということである。村社会を構造的に把握しようとする立場にたつならば、多様な生業（職分）の存在を概括的に指摘するだけでは不十分であり、それぞれの生業（職分）をめぐる社会集団や諸関係の実態、さらにはそれと村との関係などを丹念に明らかにしていかなければならない^⑥。もう一点は、酒造稼（出稼）の問題を取り上げることが、小農とは本来的に異質な労働力販売の側面が新野辺村ではどのように展開するのかを把握するのにつながるということである。そのことはさらに、それによって村社会が如何なる変容を迫られることになるのかという論点にも結び付く。こうした在地社会において労働力販売に依存する

存在は、これまで半プロや「日用」的要素などとして概念化されてきているが、その稼などの実態を一点目で述べたような視角で追究することは今なお重要な課題として残されている。本稿では、村社会の変容の問題にまで踏み込むことはできないが、以上の点を念頭に置きながら酒造稼（出稼）の展開把握に迫っていくことにしたい^⑦。

（２）新野辺村の概要

本論に入る前に新野辺村の概要を述べておこう。新野辺村は播州姫路藩領に属し、播州平野の東部、先述のとおり加古川東岸（左岸）の播磨灘沿岸部に所在した（図１参照）。この村には現在、大歳家文書という数千点におよぶ史料群が残されている。この大歳家は、天明五ノ安政元年（一七八五ノ一八五四）に新野辺村の庄屋を、また天保九年（一八



□ が新野辺組に属する村と新田を示す。

図１ 新野辺村と周辺の村むら

抽編「大庄屋」（『身分的周縁と近世社会？ 武士の周縁に生きる』吉川弘文館、2007）より

三八）からは新野辺組の大庄屋を勤めた。本稿ではこの大歳家文書を主に使用する^⑧。

新野辺村は嘉永四年（一八五二）で村高九六七石余（六三町余）を有し、二五一軒が居住していた^⑨。万延元年（一八六〇）の耕

表1 天明6年（1786）・文化2年（1805）・嘉永4年（1851）の所持高構成

階層 (石)	天明6 (本・新田畑)	文化2 (本田畑)	嘉永4 (本・新田畑)	酒造稼 (出稼)	備考 〔天〕＝天明6、〔文〕＝文化2、〔嘉〕＝嘉永4
90以上	1	1	2	0	梅谷 〔天〕 159石余→〔文〕 122石余→〔嘉〕 142石余 四郎市（伝三郎、梅谷分家） 〔天〕 53石余→〔文〕 48石余→〔嘉〕 4石余 大蔵 〔天〕 24石余→〔文〕 38石余→〔嘉〕 95石余
50～60	1	0	0	0	
40～50	0	1	0	0	
30～40	1	2	0	0	
20～30	5	5	1	0	
13～20	10	3	6	0	
7～13	17	20	16	5	
3～7	36（+2他村）	53	81	24	
1～3	20（+4他村）	21（+4他村）	28（+2他村）	11	
1未満	106（+9他村）	55（+2他村）	56（+7他村）	11	
無高	?	52	61	12	
合計	197以上 （+15他村）	213 （+6他村）	251 （+9他村）	63	

出典：天明6「才覚銀高掛り割帳」〔大蔵1171〕、文化2「諸入用割帳」〔大蔵108-1〕、嘉永4「御年貢米算用帳」〔大蔵73-11〕、嘉永4「五人組改帳」〔大蔵158-11・12〕。
注、文化2年の所持高構成には新田畑（承応期以降に高入れされた耕地）33石余が含まれていない。

地は、田地在五三町余、畑地在九町余である。^⑫大半が田地で稲作が中心であった点には注意しておきたい。

さらに階層構成をみておこう。表1は天明六年（一七八六）、文化二年（一八〇五）、嘉永四年（一八五二）の所持高構成を示したものである。ここからは、梅谷家や大蔵家が突出した所持高を有していたこととともに、^⑬天明六年段階では一石未満層が、文化二年と嘉永四年段階では三～七石層と一石未満・無高層がぶ厚く存在したことがわかる。なお、天明六年の状況と文化二年、嘉永四年のそれとがかなり異なる点が

気にかかるが、その事情は一八世紀後半～一九世紀初頭の史料がたいへん少ないため不明とせざるをえない。^⑭

一 一八世紀後半～一九世紀前半の生業

大蔵家文書の中に文政三年（一八二〇）の「当村孝行奇特人書扣」^⑮という史料がある。文字どおり新野辺村の「孝行奇特人」を書き上げたもので、一家一三人（男一人、女二人）が取り上げられている。おそらく当時の庄屋大蔵吉左衛門が村内向けに作成したものであろう。ただし、一ヶ所だけ文政十一年（一八二八）の記述があるので、その頃に写し直されたと推定される。本章では、この書上から新野辺村百姓の生業のありようを抽出したい。

なお、「孝行奇特人」の書上の後ろには酒造稼（出稼）の取締などを内容とする文化二年（一八〇五）の新野辺村百姓連判請書も書き写されている。次章では、「孝行奇特人」書上とセットである点に留意しつつ、請書作成に至る新野辺村の動向を検討することにした。

（一）三つの事例

まず「孝行奇特人」の書上から三つの事例を抜き出し、各家の生業をみよう。最初は助右衛門（五四歳）の事例である。

【史料1】

一、当村助右衛門、当辰年五拾四、親江孝行之人二而、若き時より親の意ヲ相背不申、至而幼年之時は少々宛小商内等致、農行

出情仕、元来若キ時方身をかさり不申、至而檢約ヲ相守奢ケ間敷義決而不仕、家業は随分大切ニ相勤、人とあらそいケ間敷儀不致仁福之人柄ニ而、家内睦敷、妻子ニ至迄少し茂無油断家業出情仕候ニ付、段々家富栄候得共、古風ヲ不乱、自身ニは尔今豆符杯ヲ買廻り、身を持上不申高ふらず、然共今は村方頭百姓相勤、住人衆と申、村役人ニ継村方制事被致候ニ付、貸付銀等難渋之者人ヲ頼相歎キ候へは厚ク用捨等致為相済、甚篤実成人ニ而、家内は不残持方村中是不申及他村ニ至迄持方見及候者歎心仕候、尔今父母存命中之通暮方万端不□背相用被申候は孝心之人と可申事

(傍線は筆者による)

他の史料によれば^⑩、この家は天明六年（一七八六）当時で八石余、文化一二年（一八一五）、文政三年（一八二〇）当時で一石余の土地を所持していた。史料1の傍線アからは、助右衛門が幼年の頃（一八世紀後半）には、両親と助右衛門で農業を行い、同時に助右衛門は小商い（振売）を行っていたことがわかる。ここでいう農業とは、所持高からみて所持地の耕作を主とするものであろう。また傍線イからは、文政三年当時には、助右衛門と妻と子供で所持地の耕作を行い、助右衛門は豆腐の振売を行い、さらに銀の貸付も行っていたことがわかる。全体として助右衛門家は、所持地の耕作を「家業」（本業）としつつ、それを小商い（振売）や貸付などで補完していたといえよう。

なお、傍線イからは、助右衛門は新野辺村の頭百姓（十人衆）の一員であり、それは村役人（庄屋・組頭）とともに村運営にかかわる存在であったことも知られる。

次は喜右衛門（三五歳）の事例である。

【史料2】

一、当村喜右衛門、文政三辰年三拾五、親も又喜右衛門と申、至而貧窮人ニ而子供多有之、兄は幼少より大坂江酒造持ニ遣し、今の喜右衛門は村方ニ奉公為致申処、実妹成者故主人之氣ニも入、尤村風ニ而、是又上方江酒造持ニ罷登り居申処、父ちう氣相煩農作不相成、病氣も重り甚難渋之身分ニ相成申ニ付、早速罷帰り農業出精仕、父の病氣も重り申ニ付介抱大切ニ仕候へ共、貧窮者ニ候へは万事父の心にとらざる事を母もろ共ニ相悔、三年之間養生町嚙ニ仕候へ共終命終、野辺の送り・吊も町嚙ニ致、其後は母江孝心深ク何事も母の意ニしたがひ、田畑五反余之作方弟ヲすかしなだめ耕、肥し等も行届候故、作方能出来、父の代ニは御年貢納方至而後ク、村役人より度々催促又ハ取立仕候へ共、右形合故未進等ニ差詰り甚難渋致申処、今喜右衛門カ引請作致候其年より御年貢納も早く、未進は決而不仕、今村方の壹番ニ皆済致ス、身分ハ今も貧窮者ニ而、難渋之御田地ニ候へ共、是喜右衛門カ実妹万事行届候者故、母・女房・大勢之兄弟内睦敷家内能納り、甚宜人ニ候事

(傍線は筆者による)

この家の所持高は、天明六年当時で五石余、文化一二年および文政三年当時で七石余であった。史料の傍線アからは、喜右衛門の若い頃（一八世紀末～一九世紀初頭）には、両親が農業を行い、兄は大坂へ酒造稼に出て、喜右衛門も当初は新野辺村内で奉公していたものの上方へ酒造稼になるようになったことがうかがえる。この農業も所持高からみて所持地の耕作を主とするものであろう。また傍線イからは、文政

三年当時には喜右衛門と母と弟で所持地五反余の耕作を行っていたことがわかる。全体として喜右衛門家は、所持地の耕作を家業としながら、それを奉公や酒造稼（出稼）などで補完していたといえよう。

あわせて、酒造稼として出稼に赴くことは「村風」（村の慣習）だという認識が、大歳吉左衛門や新野辺村にあったことにも注目しておこう。

三つめは儀右衛門（五五歳）と倅松四郎（二二歳）の事例である。

【史料3】

一、当村儀右衛門、文政辰年五拾五、倅松四郎年式拾式、父儀右衛門事庄吉と申、藤五郎倅二而、借財多分有之ヲ自身ニ引請、弟豊吉へ親の跡敷譲り、至而小家□借宅致、同村長兵衛と申者之娘ヲ妻取、夫婦中睦敷、子供式三人出生致養背仕処、同村儀右衛門と申貧民之者病死致、跡株絶ニ相成家屋敷ヲ譲り請、家名相統致、弥夫婦之者心合、儀右衛門は左官職致、人之処江雇れ、夜ル帰り女房同様ニ夕なへ等致、晝夜無油断相持申処、子成松四郎甚孝心成者二而、至而幼年之節は、たばこ職之者の方へ右たばこはきニ被雇、三五分宛錢ヲ貰い、又ハ氏神之松林江落葉かき等ニ参り薪木ニ為致、村方夜番等当り候節ニ右夜火番ニ松四郎参り叮嚀ニ相働申、少々田畑作仕候ニ付、儀右衛門下肥又ハ土肥杯持可申与申候へハ、幼年之松四郎父ニ不為持自身ニ荷なひ仕馴、父ハ仕馴候左官職ニ参り申、然処父□義右衛門門出、右左官職も不相成、段々養生致候へ共、病氣相重り難義及、今は養生の致方なく右門出候上ニ日灸右松四郎ニすゑさせ養生仕処、全快之躰相見へ不申、最早父は其俣相果候様存、自身食事も不致甚相悔、儀右衛門不快ニ存、其後も一□ニすえさせ養生致処、無程病氣全快仕、左官職ニ罷出候様相成候

ニ付、松四郎茂隣村江つれ立参り、夜帰りニは先ニ立惡敷道ヲ父へ断、橋通り候節は用心被致様心付、自身先江渡り父後より被渡候ヲ見届、同道ニ而罷帰り、左官職之義ニ候へハ高キ処やね杯江上り候節、成丈自身相勤父ヲ下ニ而為働、無抛時ハ一所ニ上り候へ共、我身事ハ不構父之身上あぶなき事而已安し、至而大切ニ仕候ニ付、親子至而睦敷、隣家・村中之者勤心仕候、右松四郎若キ者仲間ニ入、相談等之義又ハ踊杯致節は連中方寄集メ候ニ付、一旦は参り候へ共、透間見合罷帰り夕なへ等仕、家業少茂油断不致相働申、冬は左官職無少故、大坂江酒造持ニ罷登り、給銀は不及申主人方小使等ニ参り祝儀等貰候包錢、主人方貰候祝義、右給銀之外ニ式拾目余も俣包俣持帰り親江相渡し申ニ付、親も勤心仕、小使ニ致様と申五六匁遣し申処、母有時小使錢無之、夫留主故、如何可致と相悔申時、右六匁内四匁母江相渡し申ニ付、母も甚悦、右之形合故家内至而睦敷家富栄申なり

（傍線と波線は筆者による）

儀右衛門家の所持高は、天明六年や文化一二年当時で二升余、文政三年当時で二石余であった。文化一三（文政元年（一八一六））に二石余の耕地を獲得したようである。史料の傍線からは、松四郎が幼年の頃（一九世紀初頭）には、儀右衛門が左官職を勤め、儀右衛門と松四郎で農業を行い、儀右衛門と妻で夕なべ（内職）を行い、松四郎が煙草職のもとで「たばこはき」（詳細不明）に雇われていたことがわかる。ここでの農業は所持高からみて小作であろう。また傍線イからは、文政三年当時には、儀右衛門と松四郎で左官職を勤め、儀右衛門と妻と松四郎で夕なべを行い、さらに松四郎が冬に大坂へ酒造稼に出っていた

ことがうかがえる。全体として儀右衛門家は、左官職を家業としながら、それを農業（小作）、煙草職人のもとでの下働き、酒造稼（出稼）、夕なべ（内職）などで補完していたといえよう。

そのほか波線部分からは、家名相続への村の関与や家屋敷と家名（株）の一体性、氏神（浜之宮社）の境内松林が薪などの採取の場となっていたこと、夜番（夜火番）の存在、相談や踊りを催し強制的側面をもつ若者仲間の性格といった注目点を見出すことができる。

（2）一八世紀後半～一九世紀前半の生業と酒造稼

以上の三つの事例を足がかりに、いくつか論点を抽出しておこう。

まずは新野辺村百姓の生業についてである。「孝行奇特人」書上から、さらに事例を拾っておこう。

【五郎太夫母なつ（五三歳）】

この家の所持高は、天明六年（一七八六）には二斗余であったが、文化一二年（一八一五）、文政三年（一八二〇）には六石余にまで増えている。夫五郎太夫が存命の頃（一八世紀末～一九世紀初頭）には、夫・なつ・子供で農業（「家業」）を行い、夫は農閑期の八～四月に他国へ酒造稼に出ている。夫の病死後は、なつと子供で農業（「家業」）を行い、夜には夕なべを行い、銀の貸付も行っていた。なお、「元来なつ親の代は無高水呑貧民之者ニ候処、なつ若き時嫁ニ取、夫五郎太夫と世帯致候而より少々田畑相求、惣応之渡世致様相成申」とあるので、この家の農業はなつの嫁入り後に小作から自作へ転換したものと思われる。

【勘九郎（五二歳）と倅常蔵（一八歳）】

この家は、文化一二年、文政三年当時で四石余の土地を所持していた。文政三年頃には勘九郎と常蔵で農業（自作か）を行い、夜には夕なべを行い、また「他の麦蒔杯受取」（他家の麦蒔きの請け負い）も勤めていた。さらに勘九郎は日用稼にも出ていた。

【李太夫（五二歳）】

この家は代々大工職を勤める家で、天明六～文政三年の所持高はわずか七升余であった。李太夫が幼年の頃（一八世紀後半）、父は病死し、兄は大坂で大工職を勤め、姉と李太夫は村内で日用稼に出ていた。また文政三年頃には、李太夫が村内で大工職を勤めていた。

【弥助（五〇歳）】

この家の天明六～文政三年の所持高はわずか七升ほどであった。弥助は一〇歳代から四〇歳代まで（一八世紀末～一九世紀初頭）、庄屋所（大蔵家）に奉公し、文政三年当時は庄屋の下で歩行役を勤めていた。

【友八父庄次郎（七五歳）】

この家の天明六年当時の所持高はわずか六升余であった。一八世紀後半～一九世紀初頭頃の庄次郎は農業（小作か）を行い、村内で日用稼（米搗きなど）にも出ていた。また、毎夜夕なべを行い、雇われて夜火番にも出ていた。

以上の事例からは、新野辺村百姓の生活が、農業（自作、小作）、職人業（左官、大工など）、奉公、日用稼、出稼（酒造稼など）、貸付など、複数の生業の組み合わせで成り立っていたことがわかる¹⁷。そして、お

およその傾向として―決して明確に線引きすることを意図しているわけではない―、所持高三〇四石以上の家が所持地の耕作を基軸(家業)とする一方で、二石以下あるいは無高の家には―個々の家はそれぞれに基軸となる生業(家業)を有するものの―全体としてみれば基軸となるような特定の生業はみうけられないと整理することができる。

こうした多様な生業のひとつひとつを具体的に明らかにしていくことが次の課題となるが、その中でとくに注目されるのが、酒造稼として出稼に出る事例が多かったこと、しかも一八世紀末―一九世紀初頭にはそれは村の慣習だという認識があったことである。先述の弥助の記事に「村方之風氣ニ而、若キ時は酒造持ニ参り申二付、弥助も酒造持ニ参り申度様母江相談致候得共、母申ニは酒造持坏致候へは他国江参り可申、譬土奉公致候而も当村内ニ可致」とあることから、厳密には若い時に他国へ酒造稼に出ることが村の慣習であったと理解できる。さらに、史料2の「父ちう氣相煩農作不相成、病氣も重り甚難淡之身分ニ相成申二付、早速罷帰り」という表現、あるいは右の弥助の母が酒造稼には行かず村内で土奉公(農業奉公)などをするよう言ったという記述などからは、若者が酒造稼に出る場合には、秋―春の農閑期に限定されない可能性があり、なかには一年中酒造稼に出ることもあったと考えられる。

一方で、先述した五郎太夫母なつの記事には「夫は幼少ち仕習候酒造持ニ八月も明而四月迄他国江罷出候」と記されている。また、同じく文化二二〇文政三年当時で六石余を所持していた弥九郎(五七歳)の

記事には「幼少之時ち大坂江登り奉公仕、其後酒造持ニ罷出候」とあり、結婚後も「酒造持ニ弥九郎は長州清末江罷下り」と記されている。これらの記述からは、若い時のみならずその後も酒造稼を続ける者がいたこと、その場合は農業(稲作)の担い手であることとの関係で農閑期に限定される側面をもったことがうかがえる。

以上から、他国での酒造稼(出稼)が一八世紀末までに新野辺村百姓の再生産にとって重要な要素として定着していたこと、その中で「孝行奇特人」書上で描かれるような理想的な酒造稼像とは、若い時に村の慣習として数多くの者が酒造稼に出る、なかには一年中出る者もある、そして農業(稲作)の担い手になって以降は農閑期に酒造稼に出る、というものであったことが明らかになった。これらの点を踏まえながら、次章では一八世紀―一九世紀前半における酒造稼の展開を追っていくことにしよう。

二 一八世紀―一九世紀前半における酒造稼の展開と村の対応

(1) 酒造稼の展開

新野辺村の酒造稼(出稼)に関する記述の初見は、寛延三年(二七五〇)の「明細帳」である。そこには「男かせぎ(中略)又冬春作間二大坂酒屋米踏持ニ九拾人斗りも参り申候」とある。周知のように酒造働は大きく二種類に分かれていた。ひとつは仕込(醸造)工程に従事する蔵働人である。これは技能や熟練を必要とし、「杜氏」を中心として集団労働を行うものであった。もうひとつは精米工程に従事する米踏

働人である。これは蔵働人とは対照的に、日雇い・単純労働・重労働を特徴とし、「確頭」などと呼ばれる者を中心に単純協業を行うものであった。¹⁹「明細帳」の記述からは、一八世紀半ばの新野辺村では、九〇人ほどが農閑期に大坂の酒造家のもとへ米踏稼（精米の単純労働）に出ていたことがわかる。

その後の様子をうかがえるのが、天明五年（一七八五）の二通の届書である。一通は六月に新野辺村の村役人（庄屋、組頭）から代官役所へ差し出されたもので、前年七月から諸国へ「酒杜氏持」に出ていた二人の婦村届である。もう一通は七月頃に同じく村役人から代官役所へ差し出されたもので、翌年六月まで諸国へ「酒杜氏持」に赴く三二人の出立願である。どちらにも稼人個々の名前と出稼先が明記されている。両通の稼人の多くが重複しており、総勢は三三人となる。表2はそれを一覧にしたものである。ここに登場してくるのは、あくまで天明四～六年（一七八四～六）に一年中酒造稼に出ていた者であり、稼人のすべてではなく、農閑期だけ稼に出た者は含まれていない。その点を念のため確認しておいたうえで、二通の届書および表2から以下の点を指摘したい。

第一に、酒造稼人の労働の性格についてである。この届書から、彼らがどのような労働をどういった形態で行っていたのかまで具体的に知ることはできない。しかし、例えば婦村届の末尾に「右式拾八人之者共、去辰七月御暇奉願上、右国々人々方江酒杜氏持二罷越候所、当六月二罷帰り申候」とあるように、「酒杜氏持」という表現が用いら

れていること、さらに表2に示されているように、二年続けて稼に出た者のすべてが同じ酒造家のもとで働いていることから、蔵働に従事していたものと理解される。新野辺村の酒造稼人は、一八世紀後半には米踏働から脱却し、蔵働（仕込工程）へ進出するようになっていたと考えられる。おそらく、より数の多い農閑期だけの稼人も同様であろう。そうした中で三〇人前後が年中稼に出ていたのである。なお、「酒杜氏持」という表現は、後述するように年中稼人の多くが若者であったと思われることからすると、蔵働集団の統率者としての杜氏を指すのではなく、「蔵働」とほぼ同義で用いられているようである。

第二に、酒造家（出稼先）との関係についてである。表2によれば、豊後（鶴崎、竹田など）に一〇人、武州（埼玉郡、幡羅郡）に五人、肥前平戸に四人、紀州に四人、上州高崎に三人、讃州（丸亀、観音寺）に二人、芸州安芸郡、泉州貝塚、日向高鍋、河州大県郡、摂州伝法に各一人が赴いている。出稼先が全国に広がっていたこと、その中で特定の地域に集中する傾向にあったことがわかる。これにかかわって注目されるのが、出立願末尾の「右三拾式人之者共、当月、²⁰来ル午六月中旬迄、大坂西国町大和屋安兵衛取持二而、右国々人々方江酒杜氏持二罷越申度奉願上候」という記述である。ここからは大坂の大和屋が新野辺村の稼人と各地の酒造家との間を仲介していたことが知られる。おそらくこの大和屋は酒造働人の口入屋であり、新野辺村百姓の出稼先は大和屋の得意先だったのではなかろうか。²¹そのため特定の地域に偏ることになったのであろう。この時期の新野辺村百姓は、大坂の口入屋を

近世・播州加古郡新野辺村における酒造稼(出稼)の展開〔羽田〕

表2 天明4～6年の年中酒造稼人

番号	名 前	天明4・7～天明5・6 出稼先(酒造家)	天明5・7～天明6・6 出稼先(酒造家)	天明6 所持石高	備 考
1	三之助 (本組与平次倅)	豊後国大分郡鶴崎 木屋伊右衛門	→	13.214	
2	源六 (本組)	豊後国大分郡鶴崎 和泉屋八右衛門	→	5.934	天明5、源六女房31歳
3	吉兵衛 (本組)	豊後国大分郡鶴崎 友屋利右衛門	→	※注	
4	武一兵衛 (本組吉右衛門倅)	豊後国大分郡鶴崎 平野屋喜五郎	→	0.498	
5	平七 (本組)	豊後国大分郡鶴崎 和泉屋幸右衛門	→	8.888	
6	九之助 (本組半兵衛弟)	豊後国大分郡同尻村 勘右衛門	→	4.206	
7	長五郎 (本組八左衛門倅)		豊後国大分郡同尻村 勘右衛門	0.132	
8	長四郎 (本組伝右衛門弟)	豊後国直入郡竹田 玉屋宇兵衛	→	4.451	天明5、長四郎男子市松3歳
9	善左衛門 (本組)	豊後国直入郡竹田 正木屋小左衛門	→	0.133	
10	源之助 (本組伝七郎倅)	豊後国直入郡竹田 堺田屋八兵衛		7.587	
11	弥助 (本組)	肥前国松浦郡平戸 大文字屋十右衛門	→	0.074	
12	四郎兵衛 (本組六兵衛弟)	肥前国松浦郡平戸 平野屋虎次郎	→	5.330	
13	新五郎 (本組平四郎倅)	肥前国松浦郡平戸 高橋屋茂三郎	→	1.736	
14	喜兵衛 (本組)	肥前国松浦郡平戸 平野屋銀右衛門	→	0.259	
15	伝右衛門 (本組)	芸州安芸郡庄山田村 沢田屋八右衛門	→	4.451	
16	長九郎 (本組久五郎倅)	紀州若山御領分丸寸村 小山次郎兵衛	→	0.542	
17	四郎吉 (本組弥一右衛門弟)	紀州高野山領塚付村 茂八郎	→	4.816	天明5、弥一右衛門弟(四郎吉兄弟)五郎27歳
18	長松 (本組惣吉養弟)	紀州若山御領分段村 酒屋長兵衛	→	3.581	
19	五郎助 (本組八太夫弟)	紀州若山御領分小野町 小川屋弥右衛門	→	16.693	
20	長三郎 (本組)	泉州真光ト半様御領地貝塚南町 丹波屋八郎右衛門	→	4.972	
21	七之助 (本組藤兵衛弟)	日向国中野郡高鍋之内福嶋今町 酒屋喜兵衛	→	9.754	
22	次郎兵衛 (本組)	讃州丸亀観音寺町 三原屋与兵衛	→	3.094	
23	七之助 (本組助十郎弟)		讃州観音寺下市浦 藤田屋嘉兵衛	0.172	
24	伊助 (本組新兵衛弟or倅)	上州高崎紺屋町 高橋新左衛門	→	0.086	
25	権助 (本組)		上州高崎紺屋町 高橋新左衛門	0.061	権助娘たき：安永9(1780)生
26	嘉四郎 (本組新兵衛倅)	武州埼玉郡南河原村 吉野屋和七	→	0.086	
27	八之助 (本組藤兵衛弟)	武州埼玉郡下清久村 熊太郎	→	9.754	
28	市松 (本組権七倅)	武州幡羅郡四方寺 吉田屋六左衛門	→	0.148	
29	庄吉 (本組藤五郎倅)	武州幡羅郡四方寺 吉田屋六左衛門	→	0.172	文政3、55歳(史料3)→天明4～6、20～22歳
30	喜三兵衛 (本組)		武州幡羅郡四方寺 吉田屋六左衛門	0.074	
31	嘉助 (本組)		上州高崎さや町 大坂屋弥兵衛	無高カ	
32	伊助 (本組伊四郎倅)	河州大泉郡安堂村 三郎右衛門	→	2.725	
33	武一兵衛 (本組伊四郎倅)	摂州伝法 赤穂屋次郎右衛門	→		天明5、武一兵衛女房いわ28歳

出典：「名前」欄と「出稼先(酒造家)」欄は天明5年の2通の届書、「天明6所持石高」欄は「才覚銀高掛り割帳」、「備考」欄は「当村孝行奇特人書扣」「諸願之扣帳」〔大蔵21-1〕

注、豊後屋吉兵衛7.353石、綿屋吉兵衛5.005石、大工吉兵衛0.004石の3人が存在

介して、蔵働人として諸国の酒造家のもとへ赴いていたのである。

ただし、文化五年（一八〇八）八月九日に、大坂で盗みにあった新野辺村の伝兵衛が町奉行へ差し出した届書²²の冒頭には、「私儀酒造働仕候者二而、紀州野上溝口村酒屋忠次郎方へ当月差入稼二罷越候処、同方方二酒造人無数二付、播州表へ罷下り右稼人雇ひ呉候様相頼候二付、其意二随ひ帰国可仕与存、昨九日暮六つ頃江戸堀南側ヲ通り渡海場迄急ぎ候途中」とある。伝兵衛は紀州野上溝口村の酒屋忠次郎のもとへ酒造稼に出向いたものの、稼人を新たに雇うため帰国しようとしていたのである。また、先述の「孝行奇特人」書上の弥九郎の記事には、「尤夫婦之内二子供なく、同村源助と申者之倅ヲ養ひ、自身長ク奉公仕候長州之親方へ奉公為致」とあり、弥九郎は自身の稼先で子供も働かせたことが知られる。これらのことから、一九世紀初頭には新野辺村百姓は酒造家との間に直接的な関係を築き上げ、口入屋の介在を排除して酒造稼に出るようになっていたことがうかがえよう。

第三に、年中稼人の特徴についてである。表2の備考欄に示したように、庄吉（番号29）は天明六〇八年当時二〇〇二二歳であった。他の稼人の年齢は不明であるが、源六（番号2）、長四郎（8）、四郎吉（17）、権助（25）、武一兵衛（33）については、妻、子供、兄弟の年齢からみて、おそらく二〇〇三〇歳代前半ぐらいであったと推定される。また、表2の名前欄から各稼人の家の中の位置をみると、本組（他地域のいわゆる本百姓に該当し、家の当主を指す）が二人いる一方で、それ以外の倅や弟といった立場の者が二人もいたことがわかる。これらの点か

ら、年中稼人の中心は二〇〇三〇歳代前半のいまだ自らの家を形成していない倅や弟といった立場にある者たちであったといえよう。ただし、年齢が推定できたのは妻や子供などの年齢がわかる者ばかりであった。先述の史料2に「幼少より大坂江酒造持二遣し」とあることなども踏まえると、一〇歳代後半ぐらいの者も一定数含まれていたと理解すべきであろう。

また、表2の所持石高欄からは、無高の家から一六石余を所持する家までが年中稼人を出していたことがわかる。その中の一五人が三石以上を所持し、うち五人が本組であったことも確認できる。このことは、農業（稲作）の担い手までもが年中稼に出る状況が徐々に生まれつつあったことを示唆しているのではなからうか。

第四に、右のような年中稼の動向に対する姫路藩や新野辺村（村役人）の姿勢についてである。二通の届書はあくまでも稼人の帰村や出稼先の確認を目的とするものであった。したがって、この時期の藩や村役人は年中稼をとくに問題視するようなことはなかったといえよう。

本節のまとめとして次の三点を確認しておく。

ひとつは、新野辺村百姓の酒造稼（出稼）が一八世紀後半には蔵働（仕込工程）に進出していったことである。そうした中で、「孝行奇特人」書上で描かれたような、村の慣習として一〇歳代後半〜三〇歳代前半ぐらいのいまだ自らの家を形成していない若者の多くが酒造稼に出る、その中には年中稼に出る者も存在する、農業（稲作）の担い手になって以降は農閑期に稼に出る、というひとつのパターンが成立して

いったのである。ただしその一方で、農業の担い手までもが年中稼に赴く事態も少しずつ進行していった。

二つめに、一八世紀後半の段階では、新野辺村の稼人と諸国の酒造家との間を大坂の口入屋が仲介していたことである。これにより全国での稼が可能になったのである。しかし、一九世紀初頭には両者の間に直接的な関係が築かれ、口入屋は排除されていくことになった。

三つめに、天明期にはいまだ姫路藩も村役人も年中稼を問題視していなかったことである。ところが、この後その点が大きく変わっていくことになる。そのあたりの様子を次節でみていくことにしよう。

(2) 新野辺村の対応

新野辺村では、文化二年(一八〇五)四月に、村役人からの「申渡し」に対し百姓たちが連判で請書を差し出した。先述のとおり、これが「当村孝行奇特人書扣」に書き写されている。請書は全五ヶ条からなるが、次に掲げるのはその二条目である。なお、五ヶ条は村役人の申渡しをそのまま引用する形式になっている。

【史料4】

一、当村之義ハ古来方旅持致、只今ニ而茂酒杜氏持ニ国々江遣シ申候得共、御上様より他領奉公急度不相成旨毎度被仰渡候得共、古来方仕来之趣ヲ以九・十月方四・五月迄御百姓作間持と申立御願申上候、国々江勝手ノ二持ニ遣し申候得共、心得違之者有之、御百姓を止メ右酒造持ヲ家業ニ致、年中酒造持ニ罷出候者多出来、村方田畑不相続ニ相成荒候様成行候、能々考、

三月方八・九月迄村方ニ而農業出精可致候、年中旅持不相成旨毎々申渡し候得共、相背候者有之、此後田地作不仕候者有之は、吟味之上旅持差留可申候

ここで村役人は、姫路藩からたびたび他領奉公禁止を命じられたのに対し、「古来方仕来」を理由に九・五月の作間稼として酒造稼(酒杜氏稼)の許可を求め容認されたことを述べたうえで、そうしたところ多くの者が年中酒造稼に出てしまい、「村方田畑不相続」の状況が生まれている点などを指摘し、五月頃から八・九月までは農業に出精すること、今後年中稼の禁止を守らない者がいれば、その者の旅稼を(作間稼を含めて)差し止めることを命じている。なお、「旅稼」と「酒杜氏稼」「酒造稼」がほぼ同義で用いられている点は、必ずしも出稼のすべてが酒造稼というわけではないものの、その大半を酒造稼が占めている状況を示しているよう。

請書の一条目では、博打を厳禁し、疑わしい者は村役人へ届け出るよう命じている。その中に「此後博奕ニ携候者有之候ハ、御代官様江御願申上、嚴重之御仕置為請可申義、誠に慈悲之御仕置ニ候」との記述があり、博打にかかわった者を代官へ届け出るよう命じた藩の触が村役人の申渡しの契機になったことがうかがえる。また、三条目では旅稼などに出た若者の浪費禁止、四条目では他村・他領から無断で女房を連れ帰ることの禁止、五条目では旅稼人に不埒があれば村役人へ届け出るよう命じている。二条目を含めて、この請書には一九世紀初頭の「新野辺村」が抱える諸問題が端的に表明されており、その点で

「孝行奇特人」の書上とは対照的な性格といえる。「当村孝行奇特人書扣」には、こうした当時の新野辺村の光と影、その両面を浮き彫りにする意図が込められていたのではなからうか。

そのうえで二条目に關して以下の点を指摘しておきたい。

第一に、姫路藩の動向についてである。二条目の直接の契機になったのは、藩が他領奉公を全面的に禁止したことであった。しかも、「毎度」とあることからすると、この時期繰り返し命じられていたと考えられる。一方で、先述したように、天明期には年中稼はとくに問題視されていなかったであり、一八世紀末―一九世紀初頭に藩の方針が大きく転換したと理解されよう。その目的は藩領村むらにおける耕作者の確保にあったと思われる。

第二に、それへの新野辺村(村役人)の対応についてである。まず村役人は藩に対し作間稼として酒造稼を認めるよう要求し、それは容認されることになった。こうした村役人の動きの背景には、酒造稼が村百姓の再生産にとって不可欠だという実態や認識があったものと考えられる。しかし一方で、「田畑不相続」つまり脱農化が進むことは問題視し、村百姓に対し年中稼の差し止めを命じた。やや時期は下るが、文化一四年(一八一七)に、東隣の別府村田地を下作した武左衛門が、来年は新野辺村田地を下作することなどを村役人へ誓約した請書の冒頭には、「当村之義は勝手ニ付旅持人多分御座候而、下作人無数御田地相続不行届之儀ニ付、兼而他村御田地下作致候儀精々不相成嚴敷被 仰付承知仕罷有候処」と記されている。ここからは、たしかに旅稼(≒酒

造稼)が年中稼として広がり、耕作者の確保が難しくなる状況が生まれていたことが確認できる。こうして村役人も、藩の方針転換に同調し、年中稼を禁止していくことになったのである。ただし、藩の命令をうけて一律に年中稼を差し止めざるをえなかった点には注意を要する。それにより、これまでひとつの理想的なあり方として認識されてきた若者の年中稼さえもが禁止されることになったからである。

第三に、右の動向に対する村百姓の反応についてである。それは「年中旅持不相成旨毎々申渡し候得共、相背候者有之」という記述に端的に示されている。村役人の差し止めにもかかわらず、村百姓は年中稼を根強く展開させたのであった。こうして年中稼の問題が一九世紀半ばにかけての村(村役人)と酒造稼人(出稼人)との対立関係の中核を占めることになっていった。

一方で、一九世紀前半には村が酒造稼人へ依存する側面も生まれてきている。新野辺村の村人用の費目や各家の負担額などが書き上げられた「諸入用割帳」の文政八年(一八二五)分には、「酒造持之者」に総額一石九斗の米を賦課したことが記されている。これに關しては、「天明年中未年年柄不宜候ニ付、大工職働等無御座候而難渋之儀願出申ニ付、用捨致役米減ス、尤古来は拾七石迄も有之趣ニ付、文政七申年酒造持之者へ米掛ケ申定」ともあり、元来は大工から役米一七石を徴収していたものの、天明七年(一七八七)に大工の歎願により削減し、文政七年(一八二四)からその一部を酒造稼人に肩代わりさせるようになったことがわかる。このように村(村役人)は酒造稼人に対し、

年中稼を規制する一方で、経済的には依存していく側面をもつようになつていったのである。なお、「酒造持之者、下人壹升、頭司式升書申候へ^(兵カ)、身元上ケ可申事」という記述からは、酒造稼が杜氏と下人で構成されていたことがうかがえる。

三 一九世紀半ばの酒造稼

前章を踏まえつつ、本章では一九世紀半ばの酒造稼の実態、さらにはそれと村(村役人)との関係についてみていくことにしたい。

(1) 酒造稼の実態

新野辺村の年貢米は庄屋のもとで作成された「御年貢米算用帳」⁽²⁶⁾によつて徴収されていた。この帳面では各家へその所持高に応じて年貢米が割り付けられているが、それと同時に、先述の酒造稼人へ賦課する米も、「頭司米」「杜氏米」「酒造米」などの名目で各家へ割賦されていた(以下では、もつともよく使われている「頭司米」の表現を用いる)。そのためこの帳面から、酒造稼人を出した家や、各家の頭司米高を把握することが可能となる。「御年貢米算用帳」は天保八(嘉永四年(一八三七)五二)のうち一一年分が残っているが、表3は各年の総頭司米高、頭司米を負担した家数、一軒あたりの平均頭司米高を算出したものである。一方、表4は、天保一〇(明治元年(一八三九)六七)に他国で死亡した八人の新野辺村百姓(すべて酒造稼人)に関する諸届を書き写した帳面「他国二而病死仕候死骸其所二而葬候書類并死骸持帰

り御見分請候書類一巻、他国二而病死一件書類」⁽²⁷⁾、および類似の史料の内容をまとめたものである。

この二つの表から、まずは酒造稼の全体的な動向として次の点を押さえておきたい。

ひとつは、酒造稼の人数についてである。表3からは毎年六〇〇一〇軒ほどの家が酒造稼人を出していたことがわかる。表には示せなかったが、酒造稼人を出す家にはかなりの異動があり、天保八(嘉永四年)の一五年間に少なくとも一五〇軒ほどの家が一度は酒造稼に出ていたようである。所持高の面からいえば、二〇石余の善兵衛家(所持高第三位)から無高の家までが含まれており、酒造稼の広がりが確認される。⁽²⁸⁾ただし、前掲表1から嘉永四年における所持高階層ごとの酒造稼人を出した家の割合をみると、三(七石層で約三割に達するの)に対し

表3 天保8～嘉永3年の総頭司米高・負担家数・平均頭司米高

年	総頭司米高 (石)	負担家数 (軒)	平均頭司米高 (石)
天保8 (1837)	2.830	83	0.034
天保9 (1838)	3.010	96	0.032
天保10 (1839)	2.850	89	0.032
天保11 (1840)	2.890	85	0.034
天保14 (1843)	10.960	68	0.161
天保15 (1844)	10.410	67	0.155
弘化2 (1845)	11.690	67	0.174
弘化3 (1846)	10.240	75	0.136
嘉永2 (1849)	7.670	73	0.105
嘉永3 (1850)	3.880	66	0.058
嘉永4 (1851)	6.490	63	0.103

出典 「御年貢米算用帳」〔大蔵73〕

て、一石未満・無高層では約二割にとどまっていたことがわかる。どちらかというと所持地の耕作を基軸(家業)とする層に酒造稼人を出す家が多かったといえよう。

もうひとつは、酒造稼の期間についてである。表4からは八(一)一月に

表4 他国で死亡した新野辺村百姓

番号	年	名前	経 過	出 典
1	天保5 (1834)	又五郎伴吉蔵 (35歳)	藩へ「御暇」を願い、讃州宇足津浦(寄津浦)大和屋久三郎方へ「酒造稼」に参る／「酒造出来方」がよくなかったため帰国することに。その途中、10月16日に金比羅山を参詣したところ嵐から転落。役僧に引き上げられるが死亡／大和屋へ知らせが行き、同家で「酒造稼」を行っていた新野辺村卯兵衛伴□蔵が駆けつける／吉蔵は金比羅山の「作法」に基づき埋葬される	大歳1401-22
2	天保6 (1835)	辰五郎伴長蔵 (18歳)	8月中旬に、仲右衛門が辰五郎伴長蔵を引き請けて、河州石川郡山田村酒屋重治郎方へ「酒造稼」に赴く／12月21日、長蔵が「塚場勘釜湯」へ転落。仲右衛門や「外膳人」が引き上げ介抱するが、持病を発症し23日死亡／仲右衛門が山田村での埋葬を依頼。山田村役人は代官石原清左衛門の大津役所へ出願。検使役人(大津手代)と姫路藩大坂蔵屋敷役人が死骸見分を行う／大々塚村大念仏宗大念寺へ頼み山田村墓所に埋葬	大歳1401-18、32
3	天保10 (1839)	八太夫伴市太郎 (24歳)	8月に藩へ出願し、和州榛原へ「酒造稼」に参るが、「先方差支」により、紀州有田郡藤並組丹生村(野部村)酒屋与兵衛方へ行き「酒造下稼」を行う／10月16・17日頃から風邪気味となっていたところ持病を発症し、10月26日死亡／親類惣代津右衛門・役人代藤次兵衛が丹生村へ参り、「市太郎病跡始末」と死体を確認。市太郎死体は丹生村三味地に埋葬	大歳1136-4
4	天保14 (1843)	本組惣四郎 父惣兵衛 (62歳)	「三拾年来年々」豊後国大分郡鶴崎へ「酒造稼」に赴き「住所同様之次第」／藩へ出願し、10月1日に出生して鶴崎出町肥後屋八郎次方へ「酒造稼」に参る／10月末に病氣になり、伴・惣四郎と親類・郡兵衛が鶴崎へ参る(11月9日到着)／惣兵衛はもちなおし帰村することに。豊後国乙津村後藤家蔵の船に3人(惣兵衛・惣四郎・郡兵衛)で乗り、鶴崎を11月24日に出帆するが、12月9日に室津沖合いで惣兵衛は持病を発症し死亡／12月11日、新野辺村に到着。新野辺村から船奉行役所へ往進し、見分をうける／旦那寺・浄心院の引導で埋葬	大歳1136-4
5	弘化5 (1848)	本組弥五郎 (49歳)	「年来」、河州河内郡吉田村酒造人玄兵衛(片桐助作)方へ「酒造稼」に赴く／去年(弘化4)10月に藩へ「御暇」を願い、玄兵衛方へ参る／11月20日頃より風邪を患い、正月8日に持病の中風を発症。「下人稼」の新野辺村弥七・春吉・吉蔵が介抱。14日死亡／16日に親類2人が参り、吉田村光円寺に頼み埋葬	大歳1136-4
6	嘉永元 (1848)	文右衛門	文右衛門は「年々」、讃州鶴足郡二村へ「酒造稼」に参る者。そこで喜代蔵嬢を女房に貰い上げ、一昨年に新野辺村へ「入帳」／3月下旬、喜代蔵より祝儀に招かれ、文右衛門・女房と伴・国太郎(4歳)が赴く／4月5日頃より国太郎が痲痘にかかり死亡。喜代蔵の菩提寺に頼み埋葬	大歳1158-29
7	嘉永4 (1851)	七郎兵衛	10月に藩へ届け出て、豊後国臼杵河久徳市方へ「酒造杜氏」に赴く。「下人稼之者」2人を召し連れる。11月上旬に到着／12月2日に病死。河久徳市菩提寺の釋宗多福寺へ埋葬。その際、「下人」や同所で酒造稼をしていた坂井村(新野辺村の隣村)の者などが世話を／12月18日に「医師容録書」などが新野辺村に届く	大歳1136-4
8	嘉永5 (1852)	本組四郎兵衛 (41歳)	「作問二他国酒造稼仕候者」／11月に藩へ「御暇」を願い、讃州鶴足郡川原村宮居房吉方へ「酒造稼」(「酒杜氏」)に参る。(新野辺村の)武右衛門伴熊吉・武左衛門伴芳之助・本組新助・弥九郎伴武之助の4人を下人として召し連れる／12月5日、急病(「卒中之症」)を発し死亡。その際、「讃州所々江出稼二参候者共給銀」取り集めに廻っていた新野辺村の利助と五一兵衛が宮居方に逗留しており、「下人」とともに2人も介抱する／高砂渡海町長兵衛船に死体を積み、利助・五一兵衛が付き添って帰村	大歳1136-4
9	嘉永6 (1853)	本組作左衛門	「年々」「(数年)」代官へ出願し、紀州那賀郡山崎組西坂本村金田勝之右衛門方へ「酒造杜氏」に赴く／去年(嘉永5)11月にも藩へ出願のうえ参り、2月に帰村／3月下旬に藩へ出願しないまま、再び「酒見廻り」のため参る／6月11日、新野辺村へ作左衛門急病の知らせ。作左衛門の伴・岩蔵と兄・荒井村善兵衛が勝之右衛門方へ参り介抱するが、13日に死亡／勝之右衛門菩提寺の西坂本村法花宗浄正寺に埋葬	大歳1136-4
10	万延元 (1860)	藤兵衛 (44歳)	讃州鶴足郡那家辻村園部隆之助方へ「酒造稼」に参る／藤兵衛急病。伴・光之助と親戚・梅吉が赴き介抱するが、4月22日死亡／「先方同所」金蔵寺村天台宗遍照光院へ頼み埋葬	大歳1136-4
11	元治元 (1864)	藤五郎伴木代松	11月から大坂道頓堀幸町一丁目灘屋安蔵方へ「酒造稼」に参る／木代松病氣の知らせが新野辺村に届き、兄・太一郎と親戚・余四太夫が安蔵方へ参る／(大坂に)居合させた古宮組本庄村忠七の船を頼み、12月11日大坂を出発、西宮湊に着船。13日、駕籠で帰る途中、兵庫灘脇の浜で死亡	大歳1136-12
12	明治元 (1868)	本組惣平 (46歳)	藩に出願しないまま、松江藩領雲州韮原郡乃木村綿屋林左衛門方へ「酒造稼」(「下人」)に赴く。「杜氏」新野辺村友次郎伴甚蔵と「下人」惣一伴木蔵とともに参る／11月24日に持病発症、28日死亡／林左衛門菩提寺の松江小□町浄土真宗明宗寺に頼み埋葬	大歳1136-4

新野辺村を出立し、春に帰村するという形が一般的であったことがうかがえる。なお、番号9の作左衛門については、嘉永五年(二八五二)十一月より紀州那賀郡西坂本村金田勝之右衛門のもとで「酒造杜氏」を勤め、二月にいったん帰村したものの、三月に再び「酒見廻り」のため金田のもとへ赴き、六月一三日に病死したとある。彼の事例は年中稼のありようの一端を示しているのかもしれない。

次に、表4から酒造稼の形態について検討しよう。最初に番号8の四郎兵衛(嘉永五年当時四一歳)の事例をみたい。

【史料5】

差上申形合書之事

新野辺組同村

四郎兵衛

年四拾壹

右四郎兵衛作問二他国酒造稼仕候者二而、

先月中御暇奉願上、讃州鶴足郡川原村宮

居房吉方へ酒杜氏二罷越、既二当村武右

衛門伴熊吉・武左衛門伴芳之助・本組新

助・弥九郎伴武之助、都合四人之者召連

参り相稼居候処、四郎兵衛儀当月五日暮

六ツ半頃方急病差発申二付、一統打驚、

早速医沙相招薬用種々介抱仕候得共、卒中之症ニ而言舌等不相分、次第二差重り同夜九ツ時頃落命仕候、芳之助儀は四郎兵衛重縁之者ニ付殊ニ愁傷仕候、尚又当村方より讃州所々江出稼ニ参候者共給銀為取集、当村利助・五一兵衛兩人先月下旬出立罷下り所々相廻り、宮居房吉方江罷越人々給銀請取、夫方帰国之積りニ候処、天氣合ニ而一兩日房吉方ニ逗留仕居候内、四郎兵衛病氣ニ付、尤利助・五一兵衛兩人共四郎兵衛縁者之ものニ御座候ニ付、俱ニ厚介抱致遣候得共、急症ニ而不叶相果申候、然ル処折節高砂渡海町長兵衛船参り合候ニ付、右船相頼死躰積入、利助・五一兵衛等付添帰国仕候ニ付、右兩人共初死人四郎兵衛妻子・親類之者共へ怪敷儀ハ無之哉と誠精相糺候得共、怪敷儀毛頭相聞へ不申、全前書之通卒中之症ニ而養生不叶相果候ニ相違無之様奉存候、依之右形合書奉差上候通少シ茂相違無御座候、已上

嘉永五年

十二月

新野辺

組頭 五兵衛

同 久右衛門

大庄屋

大藏藤七郎

後見

同 慈父右衛門

公事方御役所

(傍線は筆者による)

これは四郎兵衛が嘉永五年一二月五日に出稼先で病死した旨を新野辺村役人から藩の公事方役所へ届け出た形合書である。傍線アからは、四郎兵衛は「作間ニ他国酒造稼仕候者」であり、一月より讃州鵜足郡川原村の宮居房吉のもとで「酒杜氏」を勤めていたこと、また同じ新野辺村の武右衛門倅熊吉(二四歳)、武左衛門倅芳之助(三〇歳か二八

歳)、新助(二〇歳)、弥九郎倅武之助(二〇歳)を召し連れていたことがわかる。³⁰⁾史料5の前に書かれた庄屋の覚書では、熊吉らを「下人」と表現している。すなわち、四郎兵衛は技術や経験を有した杜氏として酒造家(宮居房吉)と雇用関係を結び、複数の新野辺村の者を下人として召し連れて、集団的に酒造り(蔵働)に従事していたのである。表4の弥五郎(番号5)、七郎兵衛(番号7)、甚蔵(番号12)たちも同様の形態であったと考えられる。

続いて番号4の惣兵衛(天保一四年当時六二歳)の事例をみよう。彼は天保一四年(一八四三)一〇月より豊後国大分郡鶴崎出町の肥後屋八郎次のもとで酒造稼を行っていたが病氣になり、鶴崎に赴いた倅惣四郎らの看病でいったんは持ち直したものの、帰国の途中、室津の沖合いで病死した。ここから次の点に注目しておきたい。

第一に、この惣兵衛の場合、四郎兵衛とは違い、新野辺村からの同行者の姿が見えないことである。彼は単独で酒造家に雇われ酒造り(蔵働)に従事していたと考えられる。おそらく酒造家のもとで地元や他地域から来た稼人と協働していたのであろう。表4の市太郎(番号3)、藤兵衛(番号10)、木代松(番号11)も同様であったと考えられる。³¹⁾

第二に、惣兵衛について「三拾年来年々」鶴崎で酒造稼を行ってきたと記されていることである。おそらく彼は技術や経験を有する杜氏に近い存在であったのではなかろうか。一方で番号3の市太郎(天保一〇年当時二四歳)の場合は、村役人から代官役所と公事方役所へ差し出された届書に「酒造下稼」と明記されており、下人稼として酒造りに

表5 四郎兵衛家・弥九郎家・武右衛門家・武左衛門家の所持高と頭司米高

番号	家名	所持高(石)		頭司米(石)				天保13(1842) 請書連印(史料7)	頭司米(石)						
		天保8 (1837)	嘉永4 (1851)	天保8 (1837)	天保9 (1838)	天保10 (1839)	天保11 (1840)		天保14 (1843)	天保15 (1844)	弘化2 (1845)	弘化3 (1846)	嘉永2 (1849)	嘉永3 (1850)	嘉永4 (1851)
1	四郎兵衛	0.000	0.323	0.020	0.020	0.020	0.040	四郎兵衛	0.300	0.400	0.400	0.330	0.300	0.150	0.300
2	弥九郎	3.873	3.873				0.050						0.040	0.020	0.050
3	武右衛門	2.722	3.219		0.020								0.050	0.030	0.050
4	武左衛門	1.749	1.884	0.020 0.040	0.020	0.010	0.050	武左衛門伴芳之助 同人伴文之助	0.200	0.200	0.500	0.400	0.250	0.180	0.300

出典：「御年貢米算用帳」〔大蔵73〕

従事していたと思われる。これらのことから、単独の稼人の中にも杜氏稼の者から下人稼の者までが存在していたと考えられる。

そのうえで、四郎兵衛とその下人の家を手がかりとして下人稼を類型化してみたい。表5は「御年貢米算用帳」から四郎兵衛家、弥九郎家、武右衛門家、武左衛門家を抜き出して、各家の所持高と頭司米の負担状況をまとめたものである。また、後掲の天保一三年（一八四二）の酒造稼人請書（史料7）へ署名した者の名前も付け加えている。この表に「五人組改帳」からの情報を加味しつつ、各家ごとの酒造稼のありようを探ってみよう。

【四郎兵衛家】

表5によれば、この家は天保八年（一八三七）から嘉永四年（一八五二）までの間、毎年酒造稼に出ている。一方、「五人組改帳」からこの家の家族構成をみると、天保八年当時の男性は四郎兵衛（二六歳）だけであり、嘉永三年（一八五〇）になって男子喜代蔵が誕生している。これらのことから、四郎兵衛は遅くとも天保八年より連年酒造稼に出ており、

その中で下人稼から杜氏稼へと上昇したと理解できる。

【弥九郎家】

表5によれば、この家は天保一一年（一八四〇）と嘉永二〇四年（一八四九）に酒造稼に出ている。一方、「五人組改帳」によれば、天保一一年当時の男性は弥九郎（五五歳）とその男子武之助（八歳）、伊之助（二歳）の三人であり、弥九郎は弘化二〇嘉永元年（一八四五）頃死亡している。これらことを考えると、天保一一年には弥九郎が、嘉永二年以降は武之助が酒造稼に出ていたと理解できよう。そうすると、少なくとも弥九郎は、四郎兵衛とは異なり、一時的に下人稼に出る存在であったと把握できる。それに対し武之助は恒常的に下人稼に出る方向にあったといえるかもしれない。

【武右衛門家】

表5によれば、この家は天保九年（一八三八）と嘉永二〇四年に酒造稼に出ている。「五人組改帳」によれば、天保九年当時の男性は武右衛門（四八歳）とその男子佐蔵（二〇歳）、熊蔵（二〇歳）の三人であるが、佐蔵は嘉永三年（一八五〇）頃に帳面から消えてしまっている。これらのことから考えると、天保九年は武右衛門と佐蔵の両方かどちらかが、嘉永二〇三年は佐蔵と熊蔵（熊吉）の両方かどちらかが、嘉永四年は熊蔵が酒造稼に出ていたと理解するのが妥当であろう。ここからは、少なくとも武右衛門や佐蔵が一時的に下人稼に出る存在であったことは確認できよう。一方で、熊蔵（熊吉）は、武之助と同じく、恒常的に稼に出る方向にあった可能性がある。

【武左衛門家】

表5によれば、この家は天保八年から嘉永四年までの間、毎年酒造稼に出ている。また、天保一三年の酒造稼人請書には武左衛門の倅として芳之助と文之助が署名している。嘉永五年に芳之助が下人稼に出ていることから考えると、芳之助は遅くとも天保一三年以降、連年下人稼に出ていた可能性が高いのではなからうか。⁽³⁸⁾

これらの事例からは、下人稼には二類型あったことがわかる。四郎兵衛や芳之助などのように恒常的に稼に出るタイプと、弥九郎や武右衛門などのように一時的に稼に出るタイプである。このうち前者は、技術を身につけ経験を蓄積して杜氏へと上昇する道を歩んでいく、まさに杜氏予備軍たる存在であつたと考えられる。

一方で、「御年貢米算用帳」からは後者も一定の割合で存在したことがうかがえる。ここでもうひとつ伝次郎（天保八年当時二六歳）の事例をみておこう。「御年貢米算用帳」などによれば、彼は天保八―一〇年には酒造稼に出ていることが確認できるが、天保一四年（一八四三）には作間に城下町姫路の南にある広畑村で九六畝稼を行っていた。⁽³⁹⁾そして同村の伝次郎に雇われ、その弟庄兵衛とともに「売用」のため豊後へ向けて出帆するが、正月二六日に軀沖で病死してしまう。ここからは、一時的に下人稼に出るような者は、他の稼にも出るなど流動的な性格をもっていたことがわかる。

以上の検討をまとめると、新野辺村における酒造稼（出稼）の形態は図2のように整理できる。稼人には杜氏と下人からなる集団として稼

に出る者たちと、杜氏または下人として単独で稼に出る者たちがいた。さらに下人稼の中には恒常的な稼人と一時的な稼人とがあり、前者が杜氏予備軍たる存在であつたのに対し、後者は他の稼と行き来する流動的な存在であつた。

そのうえで次に酒造稼人と酒造家（出稼先）との関係をみよう。

表4の出稼先をみると、讃州が鵜足郡三人と宇足津浦一人の四人、豊後が鶴崎と白杵の二人、河州が石川郡と河内郡の二人、紀州が有田郡と那賀郡の二人、そして大坂と雲州意宇郡が一人ずつとなっている。先述の大坂の口入屋の姿がみえないにもかかわらず、全体としては表2でみた天明期の出稼先に近い点が注目される。もともとは口入屋の仲介によって形成された諸国の酒造家と新野辺村との関係が、その後も直接的な関係として長年の間蓄積されていくことになったと理解できるのではなからうか。

さらに稼人の雇用のあり方について二つの事例をみたい。ひとつは、先ほどから取り上げている四郎兵衛たちの事例である。史料5では、

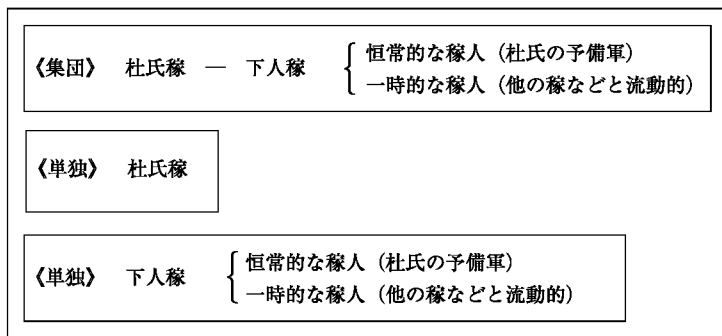


図2 新野辺村における酒造稼（出稼）

杜氏の四郎兵衛が新野辺村の者四人を下人として召し連れて行ったと記されていた。ここからは、下人は杜氏を通して酒造家に雇用されたことがわかる。同時に、四郎兵衛に引き連れられたのはいずれも新野辺村の者であり、他村の者がみうけられない点が目される。それは表4の他の稼人集団にも共通する。酒造稼人の集団形成にとって新野辺村の枠組みが大きな意味をもったことがうかがえよう。

もうひとつは、表4番号3の市太郎（天保一〇年当時二四歳）の事例である。彼が病死した際に村役人から代官役所などへ差し出された届書には、「和州灰原江指向酒造稼二罷越候処、先方差支候二付、夫方紀州有田郡野部村酒屋与兵衛方江立寄相願、則同人方二而酒造□持相働罷在候」とあり、市太郎はいったんは和州榛原へ向かったものの雇ってもらえず、そこから紀州有田郡野部村へ移り下人稼として雇われたことがわかる。こうした移動が可能になった理由としては、ひとつに酒造家どうしにつながりがあり、榛原の酒造家の紹介があったことが想定されるが、和州榛原と紀州有田郡との距離からすると考えにくいのではないか。むしろ先の一八世紀後半以来の新野辺村と諸国の酒造家との関係の蓄積という点を踏まえれば、これ以前から新野辺村と野部村（丹生村）あるいは周辺の酒造家との間に深いつながりがあり、市太郎はそれを頼りに移動したと理解する方が妥当であろう。そうであるならば、新野辺村と諸国の酒造家との関係の蓄積自体が口入機能を果たすようになっていたことになる。その点で単独の稼人にとっても新野辺村の枠組みは大きな意味をもったといえよう。

（2）村（村役人）と酒造稼人の対立

以上のような一九世紀半ばの酒造稼の展開の中で、酒造稼人と村（村役人）とはどのような関係を取り結ぶことになったのであろうか。その点を、前章で抽出した年中稼や頭司米賦課をめぐる動向に着目してみていくことにしよう。

まず年中稼については、文政七年（一八二四）に村役人が、これまで度々命じてきた年中酒造稼差し止めの遵守と、他所より無断で女性を連れ帰ることの禁止などを申し渡している。⁽³⁵⁾ また、天保六年（一八三五）には、文政七年の申渡しを守られていないとして、「三・四月五八・九月迄は農業相持、九・十月より三・四月迄之外不寄持二他所江罷越候儀は相互二吟味仕、他所奉公二決而差出シ申間敷候」と命じ、百姓から連判請書を取っている。⁽³⁶⁾ ここから、一九世紀初頭以来の年中稼をめぐる村役人と村百姓との対立関係が持続していたことがうかがえる。⁽³⁷⁾

天保十一年（一八四〇）九月にも、村役人からの申渡しをうけて百姓連判の請書が作成された。⁽³⁸⁾ 請書は三ヶ条からなるが、二条目には次のように記されている。⁽³⁹⁾

【史料6】

一、年々諸国へ酒造稼二罷越候義は銘々勝手之筋二有之候処、心得方相違仕候二付、已来出稼致度者共ハ何国誰方へ罷越申度段其年之七月晦日を限村役人江願出可申、且又遠国へは村方同道之者有之歟、或は親類之者并近隣馴染染合之者二而も同道無之二而は誰人罷越候義不相成旨被 仰聞奉承知候、向後心得違無之様急度得其意を少茂猥成義は仕間鋪候事

前半では、今後酒造稼に出ることを希望する者は七月中に「何国誰方」へ行くのか村役人へ願い出るよう取り決められている。「心得方相違仕候二付」としか述べられていないので、これがどういった問題への対策であったのか必ずしも明確ではないが、これまでの動向からみて年中稼差し止めをひとつの目的にしていたことは間違いないだろう。

これ以前にも稼に出る際には藩へ届けを行っており(表4参照)、その中で村役人も一応は出稼先を把握していたであろうが、事前に申告させることでその強化をはかるとともに、場合によっては帰村しない可能性のある者に稼の許可を与えないことで、年中稼の差し止めを徹底しようとしたのではなからうか。

また後半では、単独で「遠国」へ稼に出ることが禁じられている。これも年中稼差し止めの一環であるならば、単独の稼人を中心として年中稼が強行されており、そのため彼らの取締にとくに重点が置かれることになったと理解できよう。

さらに天保一三年(一八四二)八月に、再び姫路藩が他領奉公・旅商・旅稼の禁止を命じたのを契機に、次のような請書がつくられた。⁽⁴⁰⁾

【史料7】

「酒造稼之者他国行察当之上請書」

差上申御請書之事

一、此度従 御上様厚御趣意を以御他領江奉公并旅商内・旅稼等都而御他領江罷出渡世宮候儀厳鋪御差留被為 仰付奉畏相慎罷在候、然ル処当村之儀は前々人別多御田畑難引足り候二付、末々之者共年々作間酒造稼二罷出渡世之助力二仕相凌罷有候、

尤当御領分ニ茂数多酒造家雖御座候と夫々其土地之者共入込相稼申二付、自然御他領・御領分之無指別様相成、既ニ近來御領中ニ而相稼候者は稀ニして何れ茂御他領江罷出来候、然ルニ此度如前書之旅稼御差留被 仰出、乍恐銘々甚及難渋二候二付、種々御歎奉申上候之処、則其趣被達御上聞色々御歎被成下候得共、是迄出稼人不埒之事共多有之候段兼而達 御聞罷有候二付、

容易ニ御聞濟難被為在候を押而被申立、以来少し茂不埒成義為致間鋪段各様御請合ニ相成候二付、精誠及札明無捩筋而已可申出旨被為 仰付候趣ニ而、則夫々御札ニ相成、中ニ茂耕作打捨年分入込候儀は決而不相成、或は農業不精ニ而身持暮方等之所為ニ付旅稼相望候共御頓着無之、無捩筋而已御札ニ御座候而御利解之上、銘々共儀厚 御慈悲を以 御聞濟被 成下置難有仕合奉存候、然ル上ハ以来猥成儀は決而仕間鋪候、依之年々御暇願出随 御差図ニ作間九月下旬之頃ハ翌正・二月之頃迄罷越、尤銘々相互ニ遂吟味随分神妙ニ相稼、勿論帰国片時も差急キ可申、且御用之節は何時ニ而茂帰村可仕候、若又先方如何様ニ相頓候共決而夏稼仕間鋪候、譬ひ作間而已罷越候共、不埒之儀ハ不及申ニ、或は耕作ニ怠り又は身持暮方等不連束有之候歟、其外不寄何ニ 御差図ニ洩候廉於御座候ニは、早速旅稼被遊御差留メ、其上如何様ニ被仰付候共少茂違背仕間鋪候、万一出稼人之内如何鋪義於御座候ニは早々御注進可申上候、若乍及見聞等閑ニ仕候ハ、本人同様可被 仰付候、就中旅稼ニ付諸出入筋違変等出来、本人之上ニ而難行届歟、或は諸雜費相凌兼候節は、出稼人一統之者急度埒明弁金等仕、村方江聊御損難相掛ケ申間鋪候、為後証之御請書如件

天保十三壬寅年八月

新野辺組同村

酒造稼人

木平次（印）

（以下、四八人の連署は省略）

ここには請書作成に至る経緯が記されている。すなわち、藩が他領奉公・旅商い・旅稼を差し止めたのに対し、新野辺村の百姓たちは他領への「作間酒造稼」の継続を村役人へ嘆願した。それをうけ村役人は藩へ訴え、「以来少し茂不埒成義為致間鋪段」を請け合うことで作間稼は容認されることになった。一方で村役人は、「耕作打捨年分入込候儀」などは禁じたうえで、稼は「作間九月下旬之頃迄翌正・二月之頃迄」に限ることなどを誓訳する請書を取ったのである。ここからは酒造稼（出稼）をめぐる姫路藩・新野辺村（村役人）・村百姓の構図が一九世紀初頭のそれとまったく同じであることが確認できよう。

興味深いのは、これまでの請書とは異なり、酒造稼人四九人が連署している点である。本文末尾には、出稼人に「如何鋪義」があればすぐに届け出ること、等閑にすれば本人同様に処罰されても構わないこと、「旅稼ニ付諸出入筋違変等」に本人だけで対処できない場合は「出稼人一統」で対処することが記されている。おそらく村役人の主導で酒造稼人の集団化が図られ、それによって年中稼の取締を含む酒造稼（出稼、旅稼）の問題に取り組もうとされているのであろう。

この請書にかかわって、さらに四郎太夫の一札をみよう。^④

【史料8】

「他国^{（新野邊村）}へ酒造稼ニ参り心得違ニ付一札」

差上申一札之事

新野辺組同村本組 四郎太夫

一、当六月中從 御上様厚御趣意ニ而、御他領奉公并旅稼ニ罷出候者嚴敷御差留被為 仰付候ニ付、此度他國稼ニ罷出候者其所々江村方々兩人を以早速帰國可致旨被 仰聞、奉畏帰國可仕之処、暫時御延引ニ被成下度段御兩人江御頼申上御含貫置、此節帰國仕候、然ル処私儀近年作間酒造稼ニ罷越渡世之足シニ仕、夏分は罷帰り農業專一二相働可申之処、昨今年は大ニ心違不埒之儀ニ而、給金等茂親元江遣不申、猶又夏分帰國茂不仕耕作ニ怠り一言之申上上無御座、此度村御役人中様御呼立ニ相成帰國仕候処、村御役人中様御呼出之上、近年御百姓ニ怠り、猶親元江金子等茂差下シ不申段嚴敷蒙御察當、大ニ心得違之儀御利解之程奉恐入急度相慎可申上候之処、近來和州郡山塩町柳生屋権兵衛方ニ而相働候故、無挽子細有之、心得違ニ而來三月迄相稼候相対いたし帰り候儀、何共恐多御儀ニ候得共、藤次兵衛殿・庄藏殿兩人を以來三月迄御暇被 下置度段御歎奉申上候処、是迄不届之致方故決而相成不申趣被 仰聞、重々奉恐入罷有候、尤何分困窮之私故不得止事又候右御兩人抑而御頼申上、当壹ヶ年丈ケ酒造稼ニ御遣シ被下度段何卒御歎被下候様色々御頼申上、併私儀心得違之儀間々御座候得は容易ニ難被為在 御聞届候得共、已來急度心底相改メ、当暮は給金等も差下シ、春分は早々罷帰り農業出精可仕候間、暫時之間御兩人御請合被成下候而最一応存恐御歎被下度御頼申上候処、其趣御歎被下候ハ、御憐愍ニ而御聞届被成下種々難有仕合奉存候、然ル上ハ已來急度相慎可申、御用之節は何時ニ而茂罷帰り可申候、万一右申上候通少シニ而も相背候ハ、如何鉢ニ被 仰付候共、一言之異儀申間鋪候、為後日一札依而如件

天保十三寅年

新野辺組同村

八月

本組 四郎太夫(印)
好身 休太夫(印)
同 善右衛門(印)
立合 藤次兵衛(印)
同 庄蔵(印)
五人組頭 一之助

村御役人中様

これは、和州郡山塩町柳生屋権兵衛のもとへ年中酒造稼に出ていた四郎太夫(二八歳)^④が、六月の藩による他領奉公・旅稼の差し止めをうけて一度は帰村したものの、再び来春まで柳生屋へ稼に出ることになった際に、村役人へ差し出した一札である。ここから次の点に注目しておきたい。

第一に、藩の差し止めをうけて、村役人が「他国稼二罷出候者共」(年中稼の者)に対し帰村の指示を出していることである。これにより四郎太夫も帰村し、請書(史料7)に署名することになった。天保一年九月の取り決め(史料6)も含めて考えると、請書作成を通じた酒造稼人の集団化は、村役人が年中稼に出ていた者を呼び戻し、稼希望者の願い出をさせたいと進められたと理解できよう。

第二に、四郎太夫が去年、今年と年中稼に出ていること、さらには村役人から叱責をうけたにもかかわらず、柳生屋との契約を理由に来年三月まで稼を認めるよう再三願っていることである。ここからは、藩や村役人による差し止めにもかかわらず、年中稼が根強く展開していたこと、その背景に稼人側の欲求とともに、酒造家側の需要が存在

したことが確認できる。諸国へ帰村指示を出さなければならなかった点や、その指示に四郎太夫がすぐには従わなかった点にも、そうした状況が示されている。

なお、四郎太夫は最終的に柳生屋へ戻ることが認められている。彼の家は義母(六一歳)と二人暮らしであり、所持高も天保八年(二八三七)当時でわずか八合余に過ぎなかったことからすると、村内での生活基盤をほとんど有さない四郎太夫の年中稼を、村役人も認めざるをえなかったのではなからうか。

第三に、四郎太夫の場合、年中稼とともに、親元へ給銀を送らなかつた点が問題になっていることである。同様のことは文化二年の請書の三条目でも取り上げられており、四郎太夫に限られない問題であったと考えられる。前掲史料5の傍線イからは、出稼人の給銀を取り集めるため、利助と五一兵衛が新野辺村から讃州各地へ遣わされていたことが知られるが、これはそうした問題への対応策であったといえる。

以上のことを踏まえ、一九世紀半ばの年中稼取締に関して二点ほど指摘しておきたい。

ひとつは、繰り返しになるが、村(村役人)による取締の方法についてである。村役人は一九世紀初頭より度々請書を百姓から取ることで年中稼の差し止めを図っていたが、天保一年には酒造稼人の事前届出制をとり、出稼先の把握を強化するとともに、年中稼に出してしまう可能性のある者には許可を与えないようにした。また、天保一三年には村役人の主導で酒造稼人を集団化させ、それによる年中稼取締の徹

底が図られた。これらの背景には、一九世紀初頭以来の「村方田畑不相続」の問題が横たわっていたのである。

もうひとつは、そうした取締に対する村百姓の動向についてである。

これまでに単独の稼人を中心として年中稼が村役人との対立を孕みながら根強く展開していたことを確認してきたが、さらに天保一三年の請書への署名者が四九人である点が注目される。表3によれば、この時期には例年少なくとも七〇軒ほどが酒造稼に出ていたことが知られる。それに比べ四九人は明らかに少なすぎる。酒造稼に出ている、あるいはこれから出るにもかかわらず、請書に署名しなかった者が一定数いたと考えざるをえない。

では、それはどのような者たちだったのか。想定されるひとつは、(四郎太夫などとは異なり)年中稼に出たままで村役人の帰村指示に従わなかった者たちである。「御年貢米算用帳」の頭司米記載からは連年酒造稼人を出していたことがうかがえるにもかかわらず、請書の署名に加わっていない家がいくつか見受けられるのである。その中には杜氏稼の者から恒常的な下人稼の者までが含まれていたと考えられるが、酒造家の需要に支えられて年中稼を強行する彼らを村役人は統制しきれなかったのではなからうか。もうひとつは、請書が作成された八月段階では、いまだ酒造稼に出ることを決めていなかった者たちである。彼らは他の稼などに出る可能性ももち、酒造稼に出ても一時的に下人稼を勤めるような存在であったと考えられる。彼らについても、その流動的な性格のために村役人は統制できなかっただろう。こうして酒

造稼人を集団化させ、それによって年中稼取締を徹底させるという村役人の目論見は、十分に貫徹できなかったと推定されるのである。

最後に、頭司米の賦課について簡単にみておこう。

表5によれば、杜氏の四郎兵衛家とその下人の家における嘉永四年(一八五二)当時の頭司米高は、四郎兵衛家(所持高三斗余)が三斗、弥九郎家(同三石余)が五升、武右衛門家(同三石余)が五升、武左衛門家(同二石余)が三斗となっている。総じて杜氏の負担が大きくなっているようだが、明確な基準は見出せない。「諸人用割帳」と「御年貢米算用帳」の形式からみて、頭司米は村役人(庄屋・組頭)と五人組頭で総米高を決めたうえで、庄屋が各家へ割り付けていたと考えられるが、そこには庄屋の裁量が働く余地がかなりあったと思われる。

さらに表3から年ごとの推移をみると、天保八〜一一年(一八三七〜一八四〇)には総頭司米高が三石前後、総軒数が八三〜九六軒、一軒あたりの平均が三升余であったものが、天保一四〜弘化三年(一八四三〜六)には総米高一〇〜一二石程、総軒数六七〜七五軒、平均一斗五升前後となり、嘉永二〜四年(一八四九〜五二)には総米高四〜七石程、総軒数六三〜七三軒、平均六升〜一斗程となっている。天保一四年頃に総頭司米高が四倍近く増加した一方で、酒造稼に出る家は一五〜二〇軒程減少したため、各家の負担が激増したこと、嘉永二年以降は頭司米高は減少したものの酒造稼に出る家は増えず、そのため各家の負担は軽くなったといえ天保一〇年頃の水準には戻らなかったことがうかがえる。全体として各家の頭司米負担は次第に重くなる方向にあって

たといえよう。

このように明確な割付基準をもたないにもかかわらず、酒造稼人に對する村の経済的依存の度合いが増し、酒造稼に出る家の負担が重くなる状況は、年中稼を基軸とした村(村役人)と酒造稼人との対立を増幅させることになったのではなからうか。

おわりに

はじめに述べた問題意識の三点目、つまり酒造稼(出稼)の実態と村との関係に焦点を絞って若干のまとめを行っておきたい。

出稼としての酒造稼は新野辺村百姓の過半を巻き込んで広範に展開し、遅くとも一九世紀半ばには図2のような形で定着することになった。そこでは、経験を蓄積し技術を有した杜氏稼の者から、その予備軍たる恒常的な下人稼の者、それらの対極にあつて他の稼などの流動性をもつ一時的な下人稼の者までが存在した。また、杜氏と下人からなる集団として稼に出る場合と単独で杜氏稼や下人稼に出る場合とがあつた。こうした酒造稼の展開にとって新野辺村の枠組みが大きな意味をもつことになった。そもそも全国各地の酒造家のもとで蔵働を行うことが可能になったのは大坂の口入屋の仲介があつたからであるが、それは新野辺村を単位として行われていた。また新野辺村内で稼人の集団が形成されたり、新野辺村と諸国の酒造家との関係の蓄積が単独の稼人を口入する機能を果たすようにもなつていった。

本来、村(村社会)は土地所有を核とする小農の共同体としての性格

をもつものである。他方、酒造稼といった労働力販売——とくに下人稼としての労働力販売——は容易に代替することができものであり、当然のことながら新野辺村の百姓である必要はなく、誰でも勤めうるものであつたはずである。したがつて、本来的には村の枠組みと酒造稼(労働力販売)の展開とは重ならないはずであるが、にもかかわらず新野辺村の枠組みが大きな意味を有することになったのである。その背景には、こうした労働力販売の局面においても、新野辺村内部における、あるいは新野辺村と諸国の酒造家との間における人と人との直接的な関係、さらにはその積み重ねによる信頼関係が求められたことがあつたと考えられる。

酒造稼(出稼)の展開は、一方で年中稼や頭司米賦課の面において村(村役人)との対立関係をもたらしことにもなった。年中稼については、村役人は農業(稲作)の担い手を確保するために差し止めを図り、天保期には彼らの主導で稼人を集団化させてその徹底を目指したが、酒造家側の需要や下人稼の者の流動性などに規定されて貫徹させることはできなかった。その後も年中稼をめぐる稼人と村役人との対立は続くことになったと考えられる。また、頭司米賦課についても、明確な割付基準がみられない中で各家の負担増は、稼人と村役人との対立を増幅させていくことになったと思われる。

そうした中、嘉永六年(一八五三)におこつた村方騒動で頭司米賦課をめぐる対立が表面化することになった。同年三月に新野辺村の頭百姓を名乗る一七人が古宮組大庄屋所へ差し出した、庄屋大藏家の不正

や横暴を訴える口上書の七条目には、「酒造米与唱、酒杜氏并酒造稼人江五升、𪔐斗、二・三斗、四・五斗、𪔐石、身元相応ニ高下ニ而御年貢米同様之取立ニ而、酒造持人甚苦ミ致事」と記述されている。この口上書では、酒造米（頭司米）の問題の他に、博打を行った者からの過料銀徴収、年貢米の上納、孤独難義人扶持米の下付、浜之宮杜地の開発、奇特譚銀の徴収などに関する不正・横暴が訴えられている。村方騒動の詳細は未検討であるが、翌嘉永七年（安政元年）に大歳家と村方との間で和談が整い、その後大歳家は庄屋を退役することになった。⁴³和談書では頭司米のことに触れていないので、騒動全体の中ではこの問題はさほど重要視されなかったようである。しかしながら、大工役米の代替として文政七年（一八二四）以来続けられてきた頭司米の賦課自体が大歳家の横暴として取り上げられたことは、藩の他領奉公禁止の方針に基づくため表立って反発できない年中稼取締に対する不満とも相俟って、酒造稼人を出す家と庄屋大歳家との対立関係が深化しつつあり、そうした家の多くが大歳家を核とした新野辺村の秩序を否定する方向へ向かっていたことを示している。そのうえで、彼らがどのような新しい秩序を求めたのか、その点の解明が次なる課題となってくる。

さらに、今後の課題として二点をあげておきたい。

ひとつは、先述したように、他の多様な生業それぞれの実態を明らかにすることである。とくに酒造稼の中心が所持地での耕作を基軸（家業）とする層であった点を踏まえるならば、それ以下の層（所持高一石

未満・無高層）では労働力販売がどのように展開したのかが気になるところである。

もうひとつは、周辺地域における労働力販売の展開を明らかにすることである。「加古川市史」⁴⁵に掲載された村明細帳などをみる限りでは、新野辺村周辺の村むらで酒造稼が行われていた形跡はない。⁴⁶酒造稼は新野辺村に固有の問題であった可能性が高い。他村では同様の問題がどう表面化してくるのか、その検討が課題となる。そのうえで、個々の社会条件に規定された各村独自の展開と当該地域に共通する特質、その両面を総体として把握していくことも今後の課題である。

【註】

- (1) 吉田伸之「社会的権力論ノート」（久留島浩・吉田伸之編『近世の社会的権力―権威とヘゲモニー―』山川出版社、一九九六年）。同「所有と身分的周縁」（久留島浩ほか編『近世の身分的周縁6 身分を問い直す』吉川弘文館、二〇〇〇年）。同「地域把握の方法」（歴史学研究会編『現代歴史学の成果と課題 一九八〇―二〇〇〇年 II 国家像・社会像の変貌』青木書店、二〇〇三年）。塚田孝「歴史学の方法をめぐる断想―アメリカでの経験にふれて―」（同著『身分論から歴史学を考える』校倉書房、二〇〇〇年。初出は『市大日本史』二、一九九九年）。同「身分的周縁と歴史社会の構造」（前掲『近世の身分的周縁6 身分を問い直す』）。町田哲「地域史研究の新地平」（『部落問題研究』一六六）。同著『近世和泉の地域社会構造』（山川出版社、二〇〇四年）など。
- (2) 和泉市史の地域叙述編を念頭に置いている。『和泉市の歴史1 横山と槇尾山の歴史』（二〇〇五年）。『和泉市の歴史2 松尾谷の歴史と松尾寺』（二〇〇八年）。『和泉市の歴史3 池田谷の歴史と開発』（二〇一一年）。

- (3) 拙稿「播州姫路藩の触元大庄屋と在年行事について」(『関西学院史学』三〇)。同「播州姫路藩の大庄屋制と支役庄屋」(『ヒストリア』一八六)。同「播州姫路藩における大庄屋と村」(『ヒストリア』一九三)。同「大庄屋」(森下徹編『身分的周縁と近世社会? 武士の周縁に生きる』吉川弘文館、二〇〇七年)。同「近世・播州加古郡新野辺村の住吉頭について」(『新兵庫の歴史』一)。
- (4) 前掲塚田「歴史学をめぐる断想」アメリカでの経験にふれて」。
- (5) 池上彰彦「後期江戸下層町人の生活」(西山松之助編『江戸町人の研究』第二巻、吉川弘文館、一九七三年)。吉田伸之「表店と裏店」商人の社会、民衆の世界」(同著『巨大城下町江戸の分節構造』山川出版社、二〇〇〇年。初出は同編『日本の近世9 都市の時代』中央公論社、一九九二年)。塚田孝「近世後期大坂における都市下層民衆の生活世界」(井上徹・塚田孝編『東アジア近世都市における社会的結合』清文堂出版、二〇〇五年)など。
- (6) この点については、前掲塚田「近世後期大坂における都市下層民衆の生活世界」からとくに示唆をうけている。
- (7) 佐々木潤之介著『幕末社会論』(塙書房、一九六九年)。同著『世直し』(岩波書店、一九七九年)など。
- (8) 前掲吉田「社会的権力論ノート」。
- (9) なお、史料の性格上、酒造稼の労働内容までを明らかにすることはできない。近世の酒造業に関する論文は膨大にあるが、管見の限り、この点について具体的な検討を行ったものは、巨大化を遂げた灘地域を除いて見あたらない。
- (10) 大蔵妙氏所蔵。一部は加古川市立文化財調査研究センターを通して加古川市所蔵の写真版を利用させていただいた。なお、大蔵家文書は加古川市史編纂事業の中で整理・調査が行われたが、目録は途中(整理番号一〇二九番)までしか公開されていない。
- (11) 嘉永四年(一八五二)「御年貢米算用帳」(大蔵家文書七三一一。以下では「大蔵七三一一」というように略記する)。
- (12) 万延元年(一八六〇)「申年田畑植付帳」(大蔵一〇四六一九)。
- (13) 梅谷家は天明五年まで新野辺村の庄屋を代々勤めた、近世初頭以来の有力な家であり、元文二年(一七三七)当時でも一〇〇石余を所持していたと推定される(「新野辺村明細帳」(「新野辺町内会文書二八〇」)。また、一九世紀初頭まで、分家四郎市(伝三郎)家とあわせて二〇〇石ほどを所持していた点が注目される。一方、大蔵家については、一九世紀になって急激に土地集積を進めている点が注目される。おそらく天明五年の庄屋就任がひとつの契機になったと思われる。
- (14) あるいは、天明六年の所持高構成の典拠「才覚銀高掛り割帳」の性格、つまり姫路藩から新野辺村へ賦課された才覚銀を村内各家の所持高に応じて割り付けたものであるという点が関係しているかもしれない。
- (15) 大蔵一一二六一二。
- (16) 天明六年の所持高は「才覚銀高掛り割帳」(大蔵一一七一)、文化二二年と文政三年の所持高は「本田畑名寄帳」(大蔵四三三)、「新田畑名寄帳」(大蔵四四四)、「浜之宮新畑名寄帳」(大蔵四六六)に拠る。以下同じ。
- (17) 本論では触れられなかったが、武右衛門母ちよ(六二歳)の記事には、「倅武右衛門ニ嫁ヲ取、家名ヲ譲り、嫁ニ世帯為致自分引込、何様之事も不構、仕なれ候糸つむき致」とあり、女性の生業として糸紡ぎがあったことがうかがえる。
- (18) 新野辺町内会文書二八一一。「加古川市史」第五巻(加古川市、一八八七年)に四七号史料として掲載。
- (19) 柚木学「酒造りの歴史」(雄山閣出版、一九八七年)。屋久健二「近世大坂の酒造働入口屋仲間と都市社会」(塚田孝編『大阪における都市の発展と構造』山川出版社、二〇〇四年)。
- (20) 「諸願之扣帳」(大蔵二一一)。
- (21) 大坂の口入屋については、前掲屋久「近世大坂の酒造働人口入屋仲間と都市社会」に詳しい。ただし、そこでは口入屋を「大坂の酒造家に酒造働人を口入れする」存在としているが、本稿の事例からは、他国の酒造家に口入れする場合もあったことがうかがえよう。

- (22) 「諸願之扣帳」〔大歳二一三〕。
- (23) 大歳一三三二一。
- (24) 大歳一〇八一。
- (25) なお、文政八年の大工役米は、多吉郎、儀兵衛、仁兵衛、李太夫の四人へ三升ずつ、市郎左衛門へ五升の計一斗七升が賦課されている。
- (26) 大歳七三。
- (27) 大歳一一三六—四。
- (28) 善兵衛家は弘化三年（一八四六）と嘉永三年（一八五〇）に酒造稼に出ているが、この家は自らも酒造業を営んでおり、出稼もそれに関係しているものと思われる。
- (29) 差出人に大庄屋大歳藤七郎とあるが、ここでは新野辺村庄屋として署名しているのである。
- (30) 熊吉、芳之助、新助、武之助の年齢は、嘉永四年「五人組改帳」〔大歳一五八—一五・一六〕による。
- (31) 堅田精司「酒屋地主と雇用労働」（『近世史研究』二六）によれば、江州滋賀郡坂本村の地主N家では一九世紀半ばに数人—一〇人ほどの蔵人を用いて酒造業を営んでいるが、その内訳は、たとえば嘉永六年（一八五三）の場合、当主と家族の二人、近隣の小作人や出入百姓三人、能登、丹波、山城から来た者各一人の計八人となっている。これと同じような形で、惣兵衛たちも酒造りに従事していたのではなかろうか。さらにいえば、集団で酒造りを行っていた者たちについても、地元や他地域出身の者と協働していた可能性があらう。ちなみに、N家では、蔵人とは別に白屋稼人（米踏働人）も毎年数人雇用しており、仕込白米高一〇〇石余の小規模な酒造家においても、米踏働（精米工程）と蔵働（仕込工程）とが分離していたことが確認される。
- (32) 大歳一五八。天保八—嘉永四年（一八三七—五二）のものが断続的に残っている。
- (33) この武左衛門家の場合は「五人組改帳」との対照が困難である。何故なら、「五人組改帳」では天保八年（一八三七）以来、武左衛門とともに、

その男子として梅蔵と新作が書き上げられており、芳之助や文之助の名前が出てこないからである。その事情はまったく未詳であり、先の武右衛門家の熊蔵と熊吉の関係を含めて今後の検討課題とせざるをえないが、とりあえず本稿では、梅蔵と新作の二人と芳之助と文之助の二人とは同一人物であったと想定している。そうすると、芳之助は嘉永五年（一八五二）当時で三〇歳か二八歳であったことになる。

- (34) 大歳一四〇一—三三。
- (35) 大歳一三三二—八。
- (36) 注（35）と同じ。
- (37) ただし、「九・十月より三・四月迄之外不寄何持」他所江罷越候儀は相互二仕、他所奉公二決而差出シ申間敷候」という表現には、必ずしも年中酒造稼だけが問題であったわけではないことも示唆されている。
- (38) 大歳一三六一—一三。
- (39) 一条目は菜種の買いうけ、三条目は他所との争論に関する内容である。
- (40) 大歳一三三二—八。
- (41) 大歳一三三二—七。
- (42) 天保一三年「五人組改帳」〔大歳一五八—五〕。
- (43) 大歳一三三二—一。
- (44) 新野辺町内会文書三六九。
- (45) 前掲『加古川市史』第五卷。
- (46) ただし、表4番号7の七郎兵衛の事例では、豊後国臼杵で坂井村（新野辺村の隣村）の者が酒造稼を行っていたことが記されている。

【付記】

所蔵文書の利用を許可していただいた大歳妙氏と大歳正明氏、写真版の利用などに際し便宜をはかっていただいた加古川市立文化財調査研究センターに、末筆ながら御礼申し上げます。